一般の部（大学生等含む）

入賞作品

切手……和井田勢津
あの夏……大西　久代
野焼き……村尾イミ子
み……田村　全子
原発大地……木村　孝夫
ふるさとではむかし……三尾みつ子
よもぎ……小野ちとせ
廃寺……髙田　数豊
懐郷の海……上田由美子
仏の座……宇宿　一成

切手（文部科学大臣賞）

青森県　和井田　勢　津

震災直後に発見された女性の身元判明
という小さな新聞記事
決め手は一枚の切手だった
雪降る三月から
八度の春夏秋冬を折りたたみ
身体に名前がもどった
家族とふるさとがもどった
二センチ四方の小さな場所に
奇跡はひっそり生きていた

故郷を離れたまま帰らない弟へ
七つ上の姉は手紙を書く
　体を大事にするように

酒を飲みすぎないように
人様に迷惑をかけないように
困ったらいつでも帰ってくるように
姉が繰り返す「ように」は
湯船に溶け　弟をやわらかく包む

姉が綴る一文字一文字の香りは
部屋中に広がり　弟を遠い山色に染める
今年も家の白木蓮の蕾がつきました
最後の一行を書き終えると
いつものようにすっとなめて
切手を貼った
いつものようにポストに入れて
いつものように夕餉の支度をした
翌日の午後

姉は津波にさらわれた

いつものように弟は手紙を読み
いつものように返事を書かず
いつものように抽斗の奥にしまった

決め手は一枚の切手だった
すっとなめたいのちの一滴が
「行方不明」の表札をはずした
姉さん、切手の中にいたんだ
弟は手紙に向かってつぶやいた

ふるさとの小さな家に
姉が好きだった白木蓮は生きていた
三月の陽光をいっぱいに受け
天に向かってまっすぐ
花をふくらませている

にぎりしめた手のふくらみの中に
切手が一枚ずつ入っている
帰り道がわからなくなった人たちへ
闇夜に点々と青白く光る小石のような切手
ずっと待ち続けている人たちへ
悲しみをそっと押さえるガーゼのような切手

風がくすぐる
少しゆるんだ手のすきまから
今
白い切手が飛び出していく

あの夏（国民文化祭実行委員会会長賞）

大阪府　大西久代

あの夏は　時が放った鳥だった
燃えるような空を仰ぎ
波の間をかけ回り
砂で作ったものたちが
崩れて行く先でまた
何が作られるのか
守られていた幼い時を
この手に包んでゆらし
歌うように懐かしむ
そのありかをたどってゆくと
海からの風が霧を呼び
町はひっそりと声をなくす
遠く海から離れた日々の底で

かすかな霧笛を夢の底にきく夜がある

十歳の夏のはじまり
玄関戸をそっと閉め　鍵音を確かめる
見あげる入道雲の限りない高まり
乾いた道を行く　海へ
家並が途切れる辺りには
夏草ばかりが色を増し
気だるい真昼をさらけだして
黄瓜やトマト　南瓜　キュウリが
熱を帯びる畑地がある
始まりも終わりも
ひっそりと隠されたような空間から
瀬戸内の波打つ海が見渡せる
早足に行くと　波と波とが縺れながら
寄せてくる音が耳に届く
対岸を小さくバスが走っていく

舟でいけば何分の距離だろう
浜昼顔が薄い花びらを陽にさらし
紡績工場の煙突が
伸びあがる高さを空に放つ
棚引く煙の遥かな深みへ目を移す
その先に　もう想いは及ばない
そこがわたしのうまれたところ
切り羽と知らず思いきり羽ばたかせる

すでに川を渡っていった人との
海のうたが繰り返し胸によせる
呼びかけると萎れた心に潤う水となり
ふくらんでいく
日記帳　初めての波の記憶
眩しく光が全身に注がれていた季節
まだ見えない時の先に
どんな渦を体現するのか

この体に
どんな約束が結ばれているのか
震えながら砂浜の柔らかさに
立ち続けた

野焼き（宮崎県知事賞）

東京都　村尾　イミ子

高校の頃だったか
大人に混じって
春先の行事である野焼き*に行く
どの家からも一人ずつ出るが
多分その日
家のものは都合が悪かったのだろう
早朝から地区の人たちと
歩いて２時間ほど
ようやく久住の山裾に着く
３月の始めと言うのに
風はおだやかで陽ざしも温い

陽を帯びたオレンジ色の草原に

一斉に火が放たれ
ためらいながら
次第に猛々（たけだけ）しく燃える野
風下に向かって　火の勢いは疾（と）く
ぱりぱりと茅の弾ける音がして
燃え広がる
烟が長い舌で巻きこむように
襲いかかってくる
危うく逃げまどい
長い棒の先に付けたもので
ひたすら叩いて消す

枯れ草の野が
黒土になっていく
燃えたあとの
名残の匂いを吸い込んで

熱い大地を踏みしめる

一面の黒い原野に
よく見ると
ひと筋の道のようなものが通(かよ)っている
あれは牛みち
放牧した牛たちの
歩いた道あとらしい
うちの牛たちも
ここに放牧している

焼かれても萎(な)えず
強(したた)かに甦る草原
やがて見渡すかぎり
緑の大草原になり
牛が放たれ　草を食む
ゆうすげの花が咲き

花忍ぶの花が咲く

数百年という年月を
野焼きや放牧によって
草原は保たれてきた
野の精が
心のなかに匂い立ってくる

＊環境省の「香り風景百選」に選ばれている。

み

（宮崎県教育委員会教育長賞）

静岡県　田村全子

まだ畑が広がっていた頃から
その神社はあったのだろう
低い木立の真ん中に
屋根が見えたにちがいない
いまは住宅地の真っ只中で
樹木に囲まれ　ひっそりしている
通勤でお稲荷さんの前を通るたび
心が　しん　とする置物があった
ちょうずや近くの　石の上にある
み　の字の陀志のようなもの
その威厳は周囲を圧していた

なぜ　み　なのか

み　ばかりが気になって
鳥居も社殿も神木も
視野に入らないほどだった
みんな　お見通しだぞ
み　はそう言っていた
神が　いるかどうかは
人に教わることではない
自分で感じるものだと思う

先日　長年の謎が解けた
昔　大火があったそうだ
よく見ると
一番大きな樹に焼け跡が残っている
み　の纏いの火消しが
延焼を食い止めたにちがいない

だから　み　なのだ

み　に魅せられて
見えないものに惹かれるようになった
み　が守るやしろは
いつも涼しい木陰で
清らな風の通り道だ
み　を感じると
普遍の時間が
梢に止まっているような気がする

原発大地

（第35回国民文化祭宮崎県実行委員会、第20回全国障害者芸術・文化祭実行委員会会長賞）

福島県　木村孝夫

突然、口を塞がれる
目と耳も
話してはいけない、視野に入れてはいけない
耳で大地の声を聴いてはいけない

ここは帰還困難区域
バリケードをくぐり抜けると
荒れ果てた秘密基地のようなものが広がる
このような約束事が
この場所にはまだ必要なのだ

乾燥した大地が喉を潤す場所には
放射能が眠っている

ときどき目を覚ますから
モニタリングの数値が大きく揺れ動く

山の木が、森が、動物たちが動く
田畑の真ん中に木が突き刺さっている
夜になると大地の痛みが闇を走る
闇夜には
点々と光る目が四方にある

風が乾燥した大地の頬を傷つけていく
たくさんの割れ目があって
口を塞がれる、目と耳も
人が歩いてはならない場所なのだ

夜は動く気配に敏感だ
大地の声を聴いてはときどき涙を流す
この場所での朝露は

大地の涙なのだろう

帰還困難区域が小さくなり
原発大地の
バリケードが動けば希望が生まれる
大地に突き刺さった木は
枯れるときを待っている

あの日から十年目に入った

ふるさとではむかし（宮崎市長賞）

愛知県　三尾　みつ子

（古里では昔　お正月に兎の肉を食べた）

雪晴れ
里山の稜線に積もった雪が
はっきりと見える年の瀬の午後

集落の外れ
長身の男がうつむいて歩いている
背負い籠の中には
各家から集めた兎が
体を寄せ合って震えている
農道から男の足跡が消えた

雪の重みで竹が撓っている竹藪の中
動き廻る黒い影が見え隠れする

陽に雪が溶け始める
竹が次々に跳ね上がる
雪煙が上がる
男の荒い息が白く見える

――キィー
――キィー
兎の声が　か細く
何度も聞こえる

雪道を転げながら家に帰った
空っぽの兎小屋
はこべや柔らかなあざみの葉が大好き
赤いビー玉の目
何時も
静かで誠実だったわたしの兎
真白な姿が無かった

生き物の匂いは失せていた

あの竹藪の中には
藪椿の大木が一本ある
固い蕾のなか
遠い日々の記憶を内包して
山国の遅い春に
兎の目の色をした花をいくつも咲かせた

そして
老いてゆくわたしの中にも
赤い花びらが散り積もる

よもぎ（宮崎市教育委員会教育長賞）

埼玉県　小野　ちとせ

土手から顔を出したばかりの
銀色の綿毛の蓬を摘む

小さな手はすぐかじかんでしまうから
陽だまりにしゃがみ母の背を見ていた
まだ風が冷たい早春の空は濁りがなく
澄んだ水の色を瞳に映していた

蓬のことを餅草という
ふるさとの母は
草餅をよくこしらえてくれた

十センチに満たない餅草は

耳朶のような手ざわりと
力を秘めた匂いが詰まっている

川沿いに連なる田んぼは
いつも水の音を聞いていた
土手にタンポポの花が咲きはじめ
小鳥たちの囀りが聞こえ
やがて田んぼは桃色に染まる
レンゲの花がいっせいに咲き誇る
田起こし前のひとときは
子ども達の夢の遊び場となった

成長した餅草の葉っぱで
図書を増やすことができるため
小学生は皆たくさん摘んで干してから

学校へ持って行った

草かんむりに逢うと書く蓬の
母が作った草餅の香りが
口から胸にひろがってゆく

いまはもう逢うことの叶わない
ふるさとの亡母（ははは）を
草かんむりをつけてたずねたい
あの土手の蓬のもとへ

廃寺

（第35回国民文化祭、第20回全国障害者芸術・文化祭宮崎市実行委員会会長賞）

奈良県　高田数豊

蹴ってもけとばしても山寺（おやま）は黄色い落ち葉

風雪に染みた山門から
鳥が飛び立つ
一羽
二羽
そしてまた　一羽

和尚に追いかけられて
みんなで逃げ回った境内
母に怒られた夜
縮こまっていた本堂の隅っこ
思い出したら来い

少しお酒の入った赤ら顔に見送られて
青年は町を離れた

みかん山に向かって吹いた
和尚のハーモニカを
もう聞くことができない
あの日
青年が乗った汽車が
トンネルに入っていく
和尚
ご無沙汰しました
秘蔵のどぶろくは
まだ土の中にあるのかい
私は和尚と同じ歳になって
ひとりになりましたよ

とうもろこしを茹でてくれた竈

庫裏から抱えてきた薪
風が寄せ集めた落ち葉の山
眼は横、鼻は縦、あるがままじゃ
教えられた言葉のひとつひとつを
大銀杏が散らせている
物音ひとつしない
凍みるような窓に

懐郷の海（日本現代詩人会会長賞）

広島県　上田　由美子

眠れない夜　暗闇で耳を澄ますと
海が私を呼んでいる
それは音楽のようでも　海鳴りのようでも
深い海の底から光を通してうねりながら
抜け出てくる魚群のしぶきの音のようでも

海に漕ぎ出す小舟を見つけ
流れる雲や風に押されながら
水平線の割れ目へと揺られていく
そこには漣がきらきらと照り映えて
無辺の青の連なりから
海に消えた若者たちの歌声が
海鳴りに絡まって響きわたっている

南の島で墓島と化すまで戦い続けた彼らが
絶叫しながら命を落としたその残響は
海が奏でる葬送曲となって
母国の海へと波打ちながら轟いていく

私のふる里は海に囲まれた江田島
赤レンガの建物に象徴される海軍兵学校
父はそこの教官で戦火も極まった昭和十八年
最後の晩餐になるかも知れない宴を開こうと
少年の面影の残る生徒たちをわが家に招く
父は早朝から岸辺で小魚をいっぱい釣り
少年たちの喜ぶ顔を囲んでの宴
彼らの談笑と共に皿の中の小魚は
身ぐるみ剥がれて
骨だけが横一文字に残されて終わっていた
父は胸にこみ上げてくる無念な想いと不安を
たばこの煙の中に隠しきれず

ただ握手の手を差し出すだけだった

次の日　父はわが家からいなくなっていた
五歳の幼子に　さよならも告げず
遠い南の島で四千五百余名と玉砕した
いつまで待っても帰らぬ父を恋しがる私に
母はどんな思いでその死を納得させたのか

ふる里の海では壮麗な落日を迎える時
一本の線上から命の叫びのような色合いが
海原に広がっていくのを
天空で雲の透き間を通して死者たちが見守る

万人の心に万の景色の海があり
私の心に父と描いた二人だけの海がある

仏の座（日本詩人クラブ会長賞）

鹿児島県　宇宿一成

故郷（ふるさと）は
高齢化した過疎の農村

役場跡に沿って
〈売り物件〉と書かれた
家屋や店舗が並ぶ
かつては賑わいをみせた通りを
久しぶりにひとり
松原田（まつばんだ）へと曲がってゆくと
踏み切りは鉄柵で閉鎖され
その周りには
なかば諦められた田畑が

少しずつ野原に戻ろうとしていた

近頃は本数も減って
めったに通ることのない
ディーゼルカーの線路を
登山口の方へ
田に沿って越えれば
畦道に
ひと群れ、またひと群れと咲く
小さな紫の花
ぎざぎざの葉が
環のように茎を取り囲んで段をなす
三階草の異名を実感するには
蛙ほどの視点が必要だろう
仏の座

火山灰のやせた土壌に

水を引いて耕し
汗と泥にまみれた幾つもの世代を継いで
少しずつ上へと
拓いていったのだろうひそやかな農地
ここで米を作らなくても
もはや飢える人もない

蚯蚓のように浮腫(むく)んだ左腕のシャントで
一日おきに透析を受け
デイケアに送り迎えされながら
それでもときどき
田んぼの機械を取りに行くと言って
家族を困らせ
母と妹に
土地の見回りを一緒にさせる
老いた父よ

やがてあなたも
そしていつか私も
祖先たちがそうだったように黙って
野の仏になるのだ

畦道の花びらは
ふっくらとした小さい座布団のよう
雲間からこぼれる
春の陽射しを含んだ風にあたためられて
かつてこの地を耕した者たちが
仏となって座し
静かに笑いかける